

## 朝鮮通信使史跡探索（十一）

中 川 浩 一

高輪の大本戸を通って「朱引内」と称される江戸市街地に入った朝鮮通信使の一行は東海道を北上し、五街道の起点である日本橋を渡り、宿舎にあてられる浅草の東本願寺に到着する。旅の疲れをいやすかたわら、將軍へ国書を奉呈するための登城パレードの準備に心を砕くわけである。

「大政奉還」に基く政権交代を手始めに、関東大震災、東京大空襲が重って、江戸期の建造物はほとんどが失われた。加えて三十五年に及ぶ植民地支配に伴う歴史の隠滅など、諸々の要因が加わり、朝鮮通信使が江戸に残した足跡はないに等しいといえるだろう。

### 幼時の記憶に残る「白木名水」

江戸時代初期の寛永二（一六二五）年に創業し、白木屋呉服店の歴史を背におう白木屋百貨店を経て、昭和四十三（一九六八）年に東急百貨店日本橋店となった老舗デパートは、三越本店、高島屋日本橋店との競争に破れ、平成十一（一九九九）年一月末で閉店した。創業地の京都から江戸に進出した時点から数えると、三百三十六年の商歴であったという。

白木屋百貨店は、私にとっても想い出深い存在で、呉服売場の上得意だったという母方の祖母に連れられて、ショッピングの同伴をした幼年時代が懐かしい。一方、白木屋に父が勤めていたことからものごころついた頃から白木屋にゆき、幅が今の半分しかない木

製のエスカレーターが、カタカタと音をたてて動いていた」と回想した当時六十二歳の女性が記すエスカレーターは、東京では白木屋だけにあったのではなからうか。母に連れられてでかける新宿の三越や伊勢丹は、エレベーター利用の昇降であったと覚えている。白木屋で忘れられない存在は、地階に据えられた白木名水の井戸であった。江戸時代に地中から観音像を伴って湧出した霊泉と教えてくれたのは、だれだったのだろうか。呉服売場で祖母がショッピングする間、ときおり女性店員が私を連れて、店内を散歩したりしたのだが、多分そのときに得た知識だろう。屋上に祭られる白木観音へも、足を運んだ記憶がある。

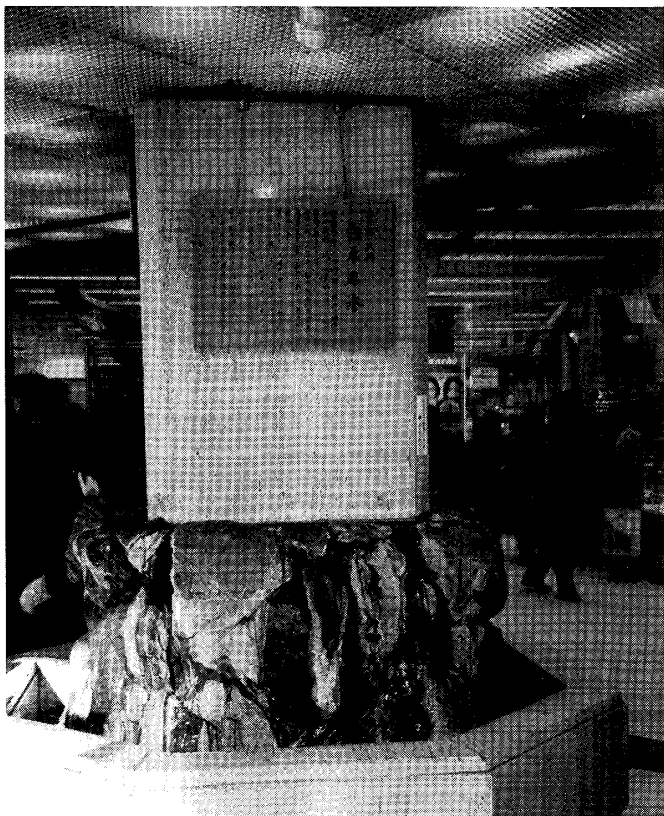
幼児期の想い出に残る「白木名水」が、朝鮮通信使の江戸探訪に深くかわると教えてくれたのは、在日韓国・朝鮮人の教育を考える会―東京を編者とする『東京のなかの朝鮮―歩いて知る朝鮮と日本の歴史』（一九九六年）であった。

東海道に面する店構えの白木屋呉服店前には、行列見物の群衆が蜚集した。そのおり「酒・茶・とうふなどの料理を顧客たちに出して大いに宣伝効果をあげたことが、「白木屋永代記録帳」に書かれています」<sup>○注1</sup>、そうしてこの手立てが評判になり、「通信使の通訳の役人が、白木屋主人の人柄や誠実な商いを賞めて贈った「長文の詩」が、白木屋井戸の碑文として残されているといわれていました」と、『東京のなかの朝鮮』は紹介している。この井戸が「白木名水」かと思われる。

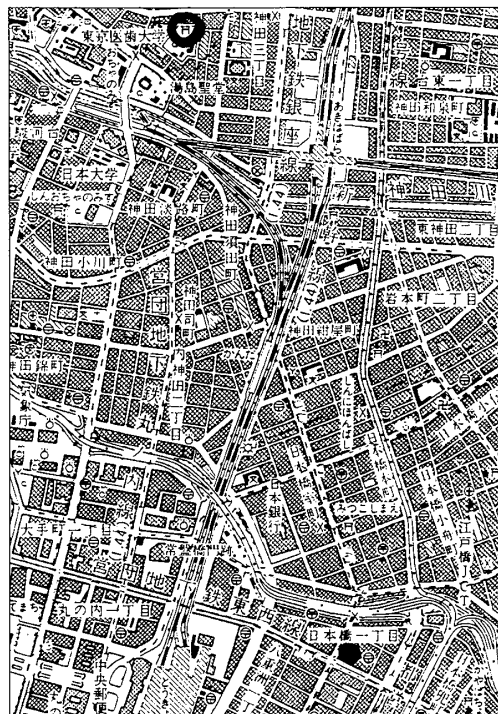
## 正面玄関に移った「白木名水」

東急百貨店が閉店を前に売りつくしセールを実施し、店内は終日雑踏をきわめているとのニュースに触発されて、一九九九年一月に「白木名水」を訪ねてみた。一月二六日付の『朝日』社会面の「青鉛筆」らんに、約三百年の歴史を刻んだ「白木観音」が閉店を前に台東区の浅草寺に引き取られるとの記事が掲載されたのも、「白木名水」を再訪しようと思ったた動機のひとつであった。

「白木名水」は、日本橋交差点に面した正面玄関の中央に自然石を積みあげて基盤をつくり、碑石を積みあげる形式で据えられていた。自然石の表面に、僅かとはいえ流水をみるのは、地下からのポンプアップの結果だろうか。だが足をとめて「白木名水」の由来に眼を走らせる人は稀である。



写真① 東急百貨店の「白木名水」(1999年1月写)



地図① 1:25,000「東京首都」  
平成10年修正測量  
●は東急百貨店日本橋店  
○は神田明神

## 東京都史跡 白木名水

の表示に続いて、次の文が記されていた。

江戸時代ははじめ下町一帯の井戸は塩分を含み飲料に適する良水を得られず附近の住民は苦しんでいました。

正徳二年（一七一三年）白木屋二代目当主大村彦太郎安全は私財を投じて井戸掘りに着手しました。

翌三年たまたま井戸の中から一体の観音像が出たのを契機にこんこんと清水が湧き出したと伝えられています。以来附近の住民のみならず諸大名の用水となつて広く白木名水と謳われました。

屋上の白木観音はその時の観音様を祀ったものであります。なお名水の源泉は当店地下にあり現在も汲み上げています。

再訪にあたって、『東京のなかの朝鮮』を再読しなかったため、受付に用意されていたという「白木観音由来」のパンフレットを手しなかったのは、痛恨の失策であった。そこには、「白木名水」と朝鮮通信使とのかわりだが、より具体的に書かれていた筈だからで



地図② 1:10,000「新宿」昭和59年 ○が日枝神社

ある。

「正徳年間、朝鮮の使節が来朝したとき白木屋に立ち寄り、白木名水の謂われを聞いて感激し、随行の儒者に霊泉記の文を作らせたということも、井戸の胴輪に刻みこみましたが、惜しくも明和・文政の大火で欠損し、大正の関東大震災であとかたもなく焼失しました。だが屋上には、井戸枠のレプリカがあったのだとも記されていた由だが、これも見落してしまった。

東急百貨店閉店後、ビルは解体され、敷地は更地化のうえ、高い塀で囲われて、内部をうかがいえなくなった。史跡の指定を受けていた「白木名水」は、どうなったのだろう。

### 絵馬に描かれる朝鮮風の鼓手

盛大を極めた朝鮮通信使の行列を、神社祭礼の山車装束に取り入れた事例のうち、美濃国大垣城下の「朝鮮軸」については明治初年まで存続し、現在は郷土博物館の展示物になっている。<sup>注3</sup>

ところで將軍のひざ元にあたる江戸でも、朝鮮通信使行列に扮した仮装が、「天下祭」と称される日枝神社、神田明神の祭礼の引きだて役になっていたのである。祭礼の行列で主役を演じる御輿と山車が、江戸城内への立寄りを許され、將軍も盛況を眼にしたために「天下祭」と称された故事をはじめ、朝鮮人への仮装については、入手容易の公刊物が数多いから、屋上に屋を架す記述は省略しよう。

両神社の祭礼とも、最近の行列は全くの日本風で、朝鮮通信使の行列から受けた影響はみられない。<sup>注4</sup>

そのため探索が後まわしになっていた日枝神社であったのだが、県立庵原高校に転勤後も朝鮮通信使の史跡調査に努力されてきた北村欽哉先生から、日枝神社を訪ねてみたら、絵馬の中に面白い図柄があり、また宝物館の展示品では、天下祭行列の番付(図鑑)から朝鮮人への仮装を示すスケッチを眼にすることができたとの便りを頂いた。

早速に足を運んだ日枝神社は、赤坂見附から虎ノ門へ通じる溜池通りに面し、エスカレーター併設の大階段が設けられていた。営団地下鉄南北線溜池山王が最寄り駅であった。階段を昇りきると回廊があり、潜り門を抜けて神域に入るが、正門、手洗舎へは右折して回廊に並行して歩き、ついで左折のうえ到達する。途中に宝物殿があり、十時開館と表示されるけれど、平日の故か扉を閉じたままであった。

文明十年(一四七八年)に太田道灌が川越から江戸城の守護神として城内に分霊したのが起源で、「江戸の産神」として広く信仰を集めたと称されるが、現在の神域はさして広いものではない。拝殿手前の左側に社務所があり、絵馬の頒布もなされていた。



写真② 日枝神社の拝殿（2001年2月写）

神田明神については、「神田明神祭礼絵巻」の中に朝鮮通信使行列の仮装が描かれているとの指摘を眼にしていたが、<sup>注</sup>日枝神社での収穫に触発されて、具体的な事物があるかもしれないとの期待を持って、同じく平日に足を向けてみた。

JR御茶水駅の聖橋口をでて、聖橋を渡り、右に湯島聖堂をみな

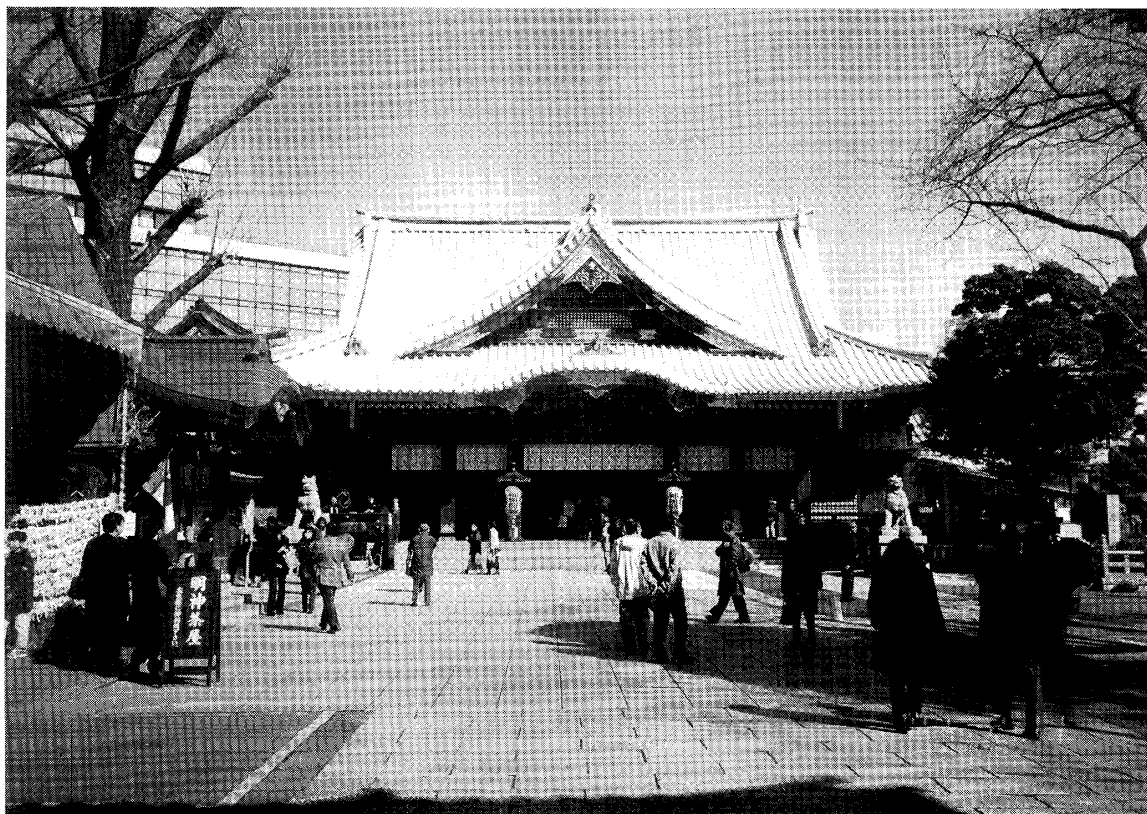
#### 天下祭行列に加わる朝鮮服の人形

干支にちなむ定番のほか、複数の図柄が用意される中に、山車に組みつけた柱の中段に朝鮮服の男性二人が立ち、太鼓をうつ様子を描いたものは、朝鮮通信使行列とかかわるものと一眼で納得した。江戸を訪れた最後の朝鮮通信使は、宝暦十四年（一七六四年）だから、二世紀を越える時点でも用いられるゆかりの図柄には驚くのみである。

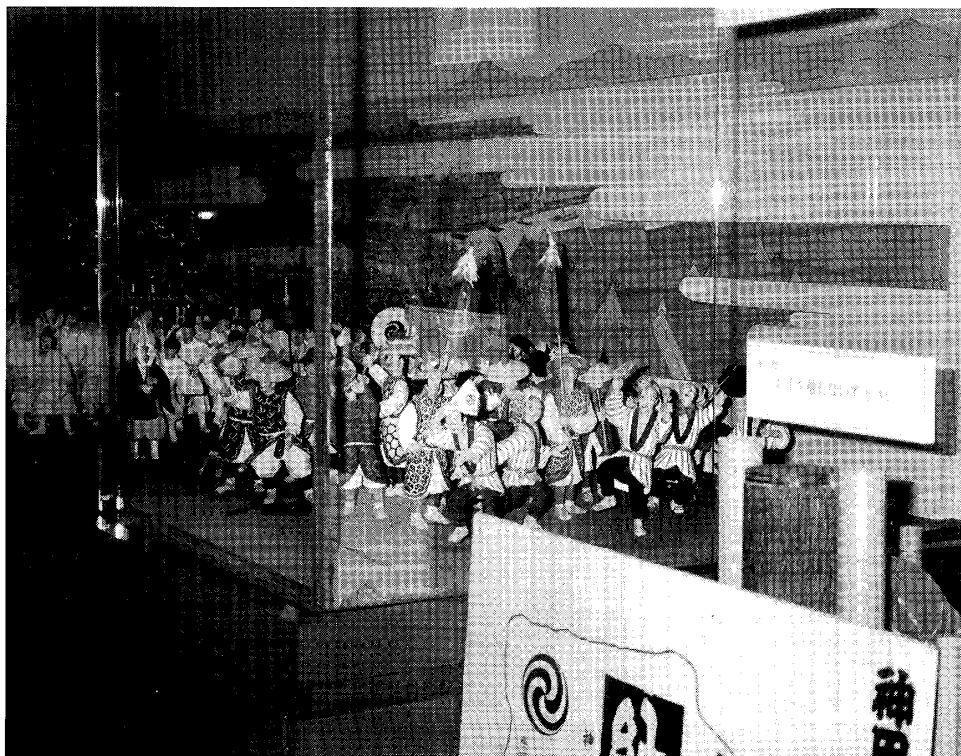
後日に再訪して見学した宝物館の展示番付では、通信使仮装の図柄はその気になって探さないと見付からない程度のものであった。



絵1 日枝神社領布の絵馬



写真③ 神田明神の拝殿 左手奥に資料室のある斎館が建っている (2001年2月写)



写真④ 神田明神資料室に展示される天下祭の行列人形 2列目に旗幟をかける朝鮮服の人形がおかれている (2001年2月写)

がら本郷通りとの交差点を渡り、右折して坂を下る途中の左側に神田明神への参道が眼に入る。

日枝神社もそうであったが、神社の象徴ともいうべき鳥居がなく、寺院風の門を潜り抜けると正面に拝殿、左に社務所が控えている。門のかたわらに、展示物のカラー写真を配したパネルがおかれ、「神田明神斎館資料室完成オープン」土・日曜日開館(二〇時〜四時、祝祭日は開館)の文字が眼に入る。



展示物解説の筆頭には、「社宝「神田明神祭礼絵巻」(住吉内記広定画)をジオラマにして再現、江戸時代後期の庶民の生活風俗を正確克明に考証した二一〇体の人形で、生き生きと表現、往時の神田祭が江戸城に参内した時の行列を見ることができると記されている。

多くの人形とあれば、朝鮮通信使行列にゆかりのものもあるのではその期待をかけて、「建国記念の日」に再び神田明神を訪れた。

斎館は拝殿の左手奥にあり、鉄筋コンクリートの三階建て、二・三階が展示室になっていた。

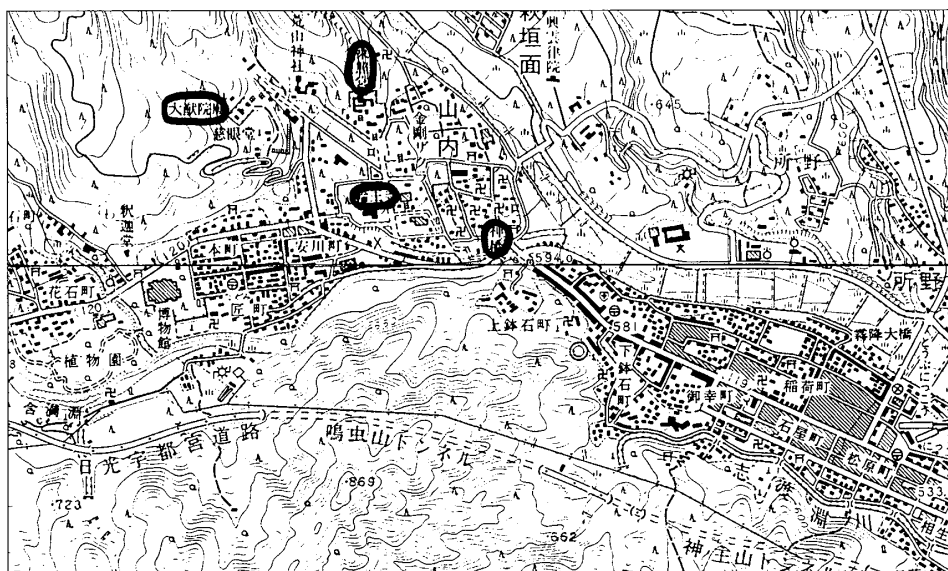
一階の受付に巫女さんが座り、拝覧料五〇〇円を収受する。階段を昇ると二階の展示室に通じるのだが、内部は照明されず、これでは展示が見学できないではないかと思ったが、敷居を一步またいだら、一斉に電灯がついたのには驚いた。少ない見学者に対応した省エネ策なのだろう。

祭礼行列のジオラマは、入口右脇に仕つらえたガラス張りのケースにおかれていた。行列の最前列は和服の人々だが、続く集団は旗指物をかざした朝鮮服の面々で、朝鮮通信使とのかわりを連想させる。神式の服装をした人々にかつがれる神輿は、その後に続いている。

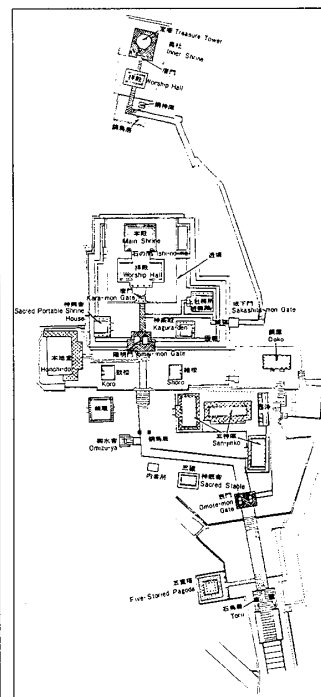
ジオラマ製作の資料になった絵巻については、巻子本三巻からなる。江戸後期広定晩年に、一ツ橋家の需めに応じ、二年有余の歳月を費やして描かれたが、第三巻の末の彩色を完成せずに、惜しくも七十一歳で病没してしまいました。全巻六七メートル余の大作。正月より月毎に展開し、初の全巻公開との解説が施される。図鑑類の展示は、日枝神社宝物館と大同小異であった。

## 東照宮に残る朝鮮国王の贈物

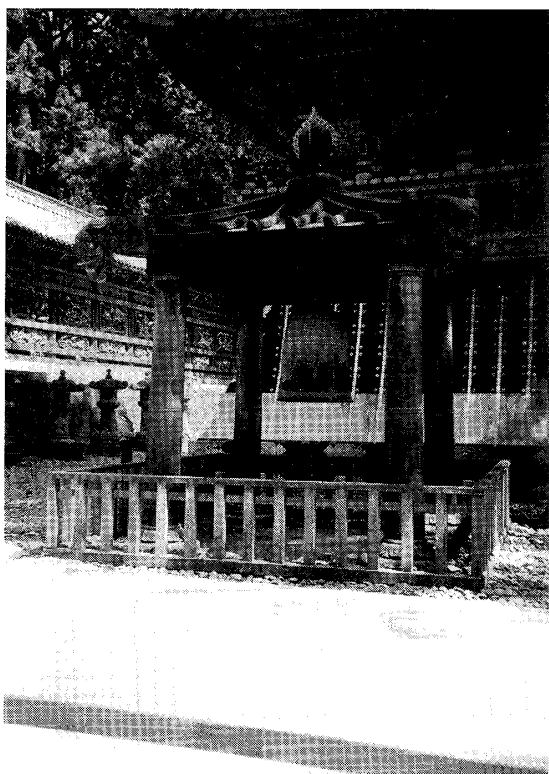
十二回の訪日を記録した朝鮮通信使の中で、江戸を訪れたのは、慶長十二年(一六〇七年)の第一次と第三次から第十一次に至る合



地図③ 1:25,000 「日光北部・日光南部」(ともに平成2年修正測量)  
北西隅が大猷院、中央奥が東照宮で手前が輪王寺、市街地西端に大谷川を渡る神橋(みはし)がある



図② 東照宮境内見取図  
写真帳『東照宮』による



写真⑤ 陽明門右手前に置かれる「朝鮮鐘」  
(2001年4月写)

せて十回であった。これらの中で、第四次から第六次までは、江戸で使命を果たした後、日光に足を延している。このうち第四次での日光遊覧は、対馬藩を介して綿密に打ち合せた筈の日程からはみだすハプニングであった。

仕掛人は、三代將軍徳川家光で、祖父家康を祭神として落成直後の東照宮参拝を、使節の江戸到着後に強く求めた結果であった。前例にない企てと三使側は拒否するが、交渉の仲立役となる対馬藩の窮状を察して、日光参拝の旅を「遊覧」に読みかえての実施と伝えられている。

寛永二〇年(一六四三年)に、世子家綱誕生慶祝を至上の課題として来日した第五次の使節は、東照宮での致祭と家康を葬る宝塔への献物を当初から目的に加えていた。

杉木立の間を緩傾斜で登る参道が石鳥居の建つ階段に達すると、左側に五重塔がそびえたつのが眼に入る。家康によって日光山座主に任じられた南海坊天海僧正が、輪王寺、東照宮、二荒山神社を一体化し、神仏混合の運営を図った結果であろう。拝覧料を支払って



写真⑥ 石壇上に据えられた宝塔の基部に三具足が置かれている(2001年4月写)

表門を潜り抜けると、前方と右方は三神庫で石畳の参道は左折し、ついで右折して銅鳥居を潜ると、正面に日暮御門ひぐらしの異名を持つ陽明門を望見する。石段を昇って陽明門に達するまでに、右手に鐘樓が控えているのだが、それと参道との間に屋根がつく四本柱を支えにして、朝鮮鐘が据え付けられる。銘文を持つこの鐘は、寛永二〇年に朝鮮国王から贈られたもので、撞くためのものではなく、東照大権現として家康を東照宮に祭った家光の孝行を賛える銘文を読ませる目的で、低い位置を選んだ由である。<sup>○注6</sup>

参道の左側には鼓楼があり、その周囲にオランダが幕府に献じた「釣灯籠」「廻転灯籠」が配される。誤って葵紋を逆さに付けた廻転灯籠については、オランダからの献上品と記す標札があるにもかかわらず、朝鮮鐘への言及を欠くのは、明らかに差別である。<sup>○注7</sup>

陽明門を潜り抜けると正面に唐門があるが、ここから昇殿できるのは、「御目見得」以上と大名などに限られた。東照宮境内で日朝交流にかかわるもう一つの事物は、坂下門を通り、杉木立の間を登りつめて達する奥社である。府中で没し久能山に葬られた家康の遺骸を一年後に改葬した由来を持つ宝塔が奥社の主体だが、現存する唐銅製の宝塔は、木造、石造を経てのものだという。<sup>○注8</sup>

寛永二〇年に東照宮を拝礼した使節は、国王の贈った三具足（香炉・燭台・花瓶）を宝塔に供えている。幕府は、三具足以外は、その後はなにも置かせなかった。現存する三具足は、火災が原因となる再鑄品の由である。<sup>○注9</sup>

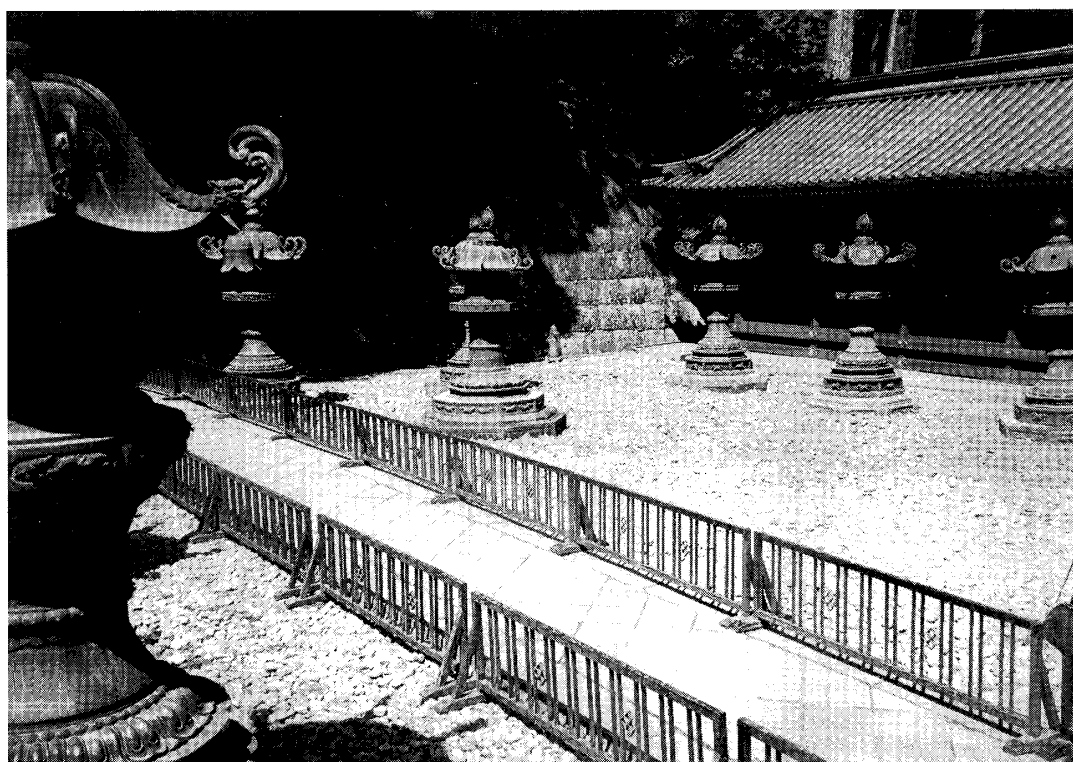
## 大猷院拝殿前の朝鮮製灯籠

明暦元年（一六五五年）に日光を訪れた朝鮮通信使は、前回も行った東照宮での致祭に加えて、家光の墓所として作られた大猷院への参拝も実施した。そのおりに、朝鮮国王からの進物である銅製の灯籠が、大猷院の境内に据え付けられた。

大猷院に朝鮮国王が贈った灯籠があるとの情報は、影山雄之先生

（元水戸市立洒門小学校長）から寄せられたが、その所在をみつけたのは大変だったと、後日改めてうかがった。東照宮の「朝鮮鐘」と同じく、標示を欠いているからである。

探索におもむく直前に刊行された仲尾宏『朝鮮通信使―江戸日本



写真⑦ 大猷院拝殿右手に並ぶ銅灯籠 左手の一段高い位置にあるのは御三家の奉納、画面中央に朝鮮から渡来の銅灯籠がある（2001年4月写）





写真⑧ 朝鮮国王が奉納した銅灯籠 右手奥が夜叉門 (2001年4月写)

への善隣使節』NHK・TVテキスト(二〇〇一年)は、孝宗<sup>ヒョソン</sup>国王から贈られた灯籠と題する写真が配したが、位置の判定には余り役立たない。

大猷院は、五重塔脇から北西に延びる道をたどり、二荒山神社の社殿を右にみて、突当った位置に控えている。石畳の参道に沿って灯籠が並び、献上者名が刻記されるが、数が多すぎて判別がむずかしい。参拝後に探すことにして、左折して石段を登り、二天門を潜り抜ける。さらに夜叉門を経ると、正面に拝殿が眼に入る。清掃中の女性職員に、朝鮮から渡来した灯籠はどれかとたずねたが知らないと答え、事務所で聞いてくれとの情けない応対であった。

拝殿内部は東照宮が神式であるのに対し、仏式に仕つらえられている。朝鮮からもたらされた灯籠の位置をただしたら、拝殿をでて左へ曲がり、石垣ぞいに廟所に至る石畳の脇にあると教えられた。石畳と石垣の間、つまり拝殿に最も近い位置にあるのは、御三家の奉納だが、石畳の右手に据え着けられたもののひとつが、朝鮮国王から奉納されたものと具体的に説明を受けた。



地図④ 1:25,000 「常陸藤沢」平成12年修正測量  
1:25,000 「土浦」平成7年修正測量  
1は小坂神社、2は土浦市立博物館

#### 土浦城下の祭礼に登場の通信使行列

至近の位置に立って観察すると、日本製のものと様式は微妙な点が異なり、加えて銘文が、朝鮮からもたらされた事実を明らかにする。NHKテキストには、銅灯籠一對などが贈られたと書かれているので、境内の他にも、さらに銅灯籠があるのかもしれない。

『図説朝鮮通信使の旅』には、輪王寺宝物殿では、朝鮮国王からの親筆、金欄銀香盒、祭儀に朗読された国王の祭文、楽器の祝、敵の二種をみることができると記されるので、隅々まで見学したが、どれも展示されていなかった。理由は、二〇〇一年四月二十八日から六月三日まで、京都文化博物館で開かれる特別展「このころの交流 朝鮮通信使―江戸時代から二一世紀へのメッセージ」への貸出し中の手順にあったのだろう<sup>注10</sup>。

朝鮮通信使の来日は、江戸往復の海路・陸路に沿う集落の人々を



図③ 下は入場券図案の中の朝鮮通信使行列 右下に「清道」の幟をかかげる通信使行列に扮装の人たちが描かれている。上は「土浦町御祭礼図」の一部分

始め、近郷近在にも強いインパクトとなって作用した事实は、いくつもの文献を介して紹介されてきた。それどころか、朝鮮通信使行列とは全く無関係の土地にも、祭礼の仮装行列に取り入れられる例があり、三重県津市の分部神社、同県鈴鹿市東五垣町の「唐人踊り」が、現在も演じられている由である。<sup>註11</sup>

通信使仮装行列の絵図が、「土浦御祭礼之図」として、土浦市立博物館に所蔵されているとの情報は、『図説朝鮮通信使の旅』（二〇〇〇年）から読みとった。<sup>註12</sup> 続いて、北村欽哉先生から土浦で演じられた行列は、八坂神社の祭礼にかかわるものとの便りを頂いた。

早速、土浦市の観光パンフレットで検証すると、その位置は亀城の別称を持つ土浦城を基幹にして展開し、水戸街道の宿場もかねた中心市街ではなく、真鍋地区に八坂神社が現存する事実が判明した。絵図は、市立博物館所蔵とされるので、探索は、博物館訪問から手をつけた。受付で来館の主旨を話すと学芸員へ取り次れた。絵図の詳細は、特別展の図録で言及していますとの説明に加えて、常設展示中だが通信使仮装行列の部分は公開していないと告げられた。

「土浦御祭礼之図」は小型の折本で、展示中の画面は、通信使仮装行列とは無関係の図柄であった。しかし、入場券、入館者用パンフレットには、通信使仮装行列が取り入れられていた。

図録は、一九九三年十月二十四日から十二月五日まで開催した「にぎわいの時間—城下町の祭礼とその系譜」に際して刊行したものだ<sup>と</sup>が、入手したのは、二〇〇一年三月に発行した第二刷で、需要の多さに驚かされる。

近世の土浦を特色づけた八坂神社の祭礼祇園祭を描いた「土浦御祭礼図」「土浦町内祇園祭礼式真図」「東崎町御祭礼図」の紹介を出発点とし、華麗を極めた江戸の天下祭の状況、さらにその影響を受けた関東各地の祭礼を、ビジュアルに紹介するのが狙いであった。

土浦にかかわる三つの絵図には、どれも朝鮮通信使行列に仮装した人々が描かれている。

「土浦御祭礼之図」は「文化九壬申歳六月」の書きこみがあつて

十九世紀のはじめの時点で、通信使行列への仮装がなされた事実を教えてくれる。江戸を訪れた最後の通信使は、宝暦十四年（一七六四年）の第十一次で、文化八年は、対馬の府中（現・厳原）での聘礼であった。

祇園祭の行列で朝鮮通信使一行に扮したのは、土浦城下に位置す



図④ 三春人形の羯鼓（かっこ）

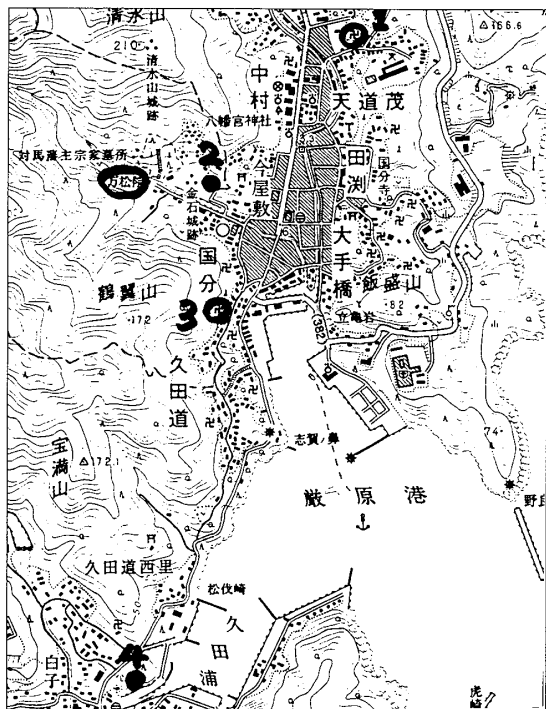
る中町の住民であった事実が、注記によって判明する。異風俗の朝鮮通信使一行から受けた影響は、全国各地で郷土人形のモチーフとして取り入れられた。広島県下蒲刈町の「御馳走一番館」には、充実したコレクションがある。祭礼の事例と同じく、通信使行列が足跡を記さなかった土地での作品も数多い。とはいえ、今日でも常時製作とは限らない事例もあり、日本三大稲荷のひとつといわれる伏見稲荷に参詣したおりの土産となる伏見人形については、いくつもの店を訪ねてみたが、通信使行列にかかわる作品を眼にしえなかった。だが福島県三春町で入手した張子人形のデザインには、今なお異国人の行列から受けた印象を取り入れている事例を眼にすることができた。

#### （補説）

最北端の丘に登ると、晴れた日の夜には釜山の灯が見えるという国境の島対馬は、朝鮮通信使の一行が、始めて踏みしめる異国の土地である。なかでも幕府に命じられて終始対朝鮮王国との外交接渉を担当した対馬藩の城下町である府中（現・厳原）には、朝鮮通信使にかかわる史跡・遺跡が、数多く残っている筈である。

けれども、一九九七年三月に厳原を訪れた時点では、情報は乏しかった。厳原の城跡に「朝鮮國通信使之碑」が一九九二年に建立された事実に加え、歴史民俗資料館に朝鮮通信使行列絵図が展示されている事実が事前に判ったにすぎなかった。現地にゆけば、多少は得る処もあるだろうと考えて出向いた結果については、連載した本稿の（二）に記述した。

現地では、観光協会案内所で大変お世話になった。そのおり入手した冊子『江戸時代に隣りの国から来た朝鮮通信使』は、以後、ゆかりの土地を訪ねる旅をくり返すときに、ガイドブックとして、非常に役立った。このときの旅は、対馬最北端の鰐浦に建つ訳官使遭



地図⑤ 1 : 25,000「厳原」昭和57年修正測量  
1は雨森芳州墓 2は県立対馬歴史民俗資料館  
3は西山寺 4は対馬藩お船江あと  
万松院は対馬藩主の墓地

難追悼碑の見学も日程に折りこみ、帰途の航空便とのかかわりもあって、盛り沢山にすぎ、厳原で見落した事物が多いのが帰宅後にくやまれた。それゆえ、JR九州が企画した「朝鮮通信使の足跡と文化を訪ねる四日間―玄界灘の波濤を越えて」への参加は、非常に有益であった。釜山から高速船利用で着いた比田勝から厳原まで、克明に案内して下さった永留久恵先生の該博な知識に助けられ、得る処が実に多かったからである。対馬で小・中学校の教員を歴任され、学校長も勤められた先生は、対馬芳洲会会長でもある郷土史の権威で、話上手であった。

厳原では、公園化した金石城跡に、「文化八（一八一）年度 朝鮮通信使幕府接遇の地」と記す標識が建つほか、市街でも同じ標識をいくつか眼にすることができた。天明の大飢饉発生に始まる経済的困窮、社会不安の続発によって、経費節減が必要な幕府側の事情に加えて、朝鮮王国側にも、天災に加えて両班階層での派閥抗争など、江戸までの長い旅路を必要とする通信使の派遣を行いくい情勢が存在した。こうして対馬で両国使節が国書を交換する「易地聘礼」が実施されるのだが、そのことにかかわるゆかりの地に、前

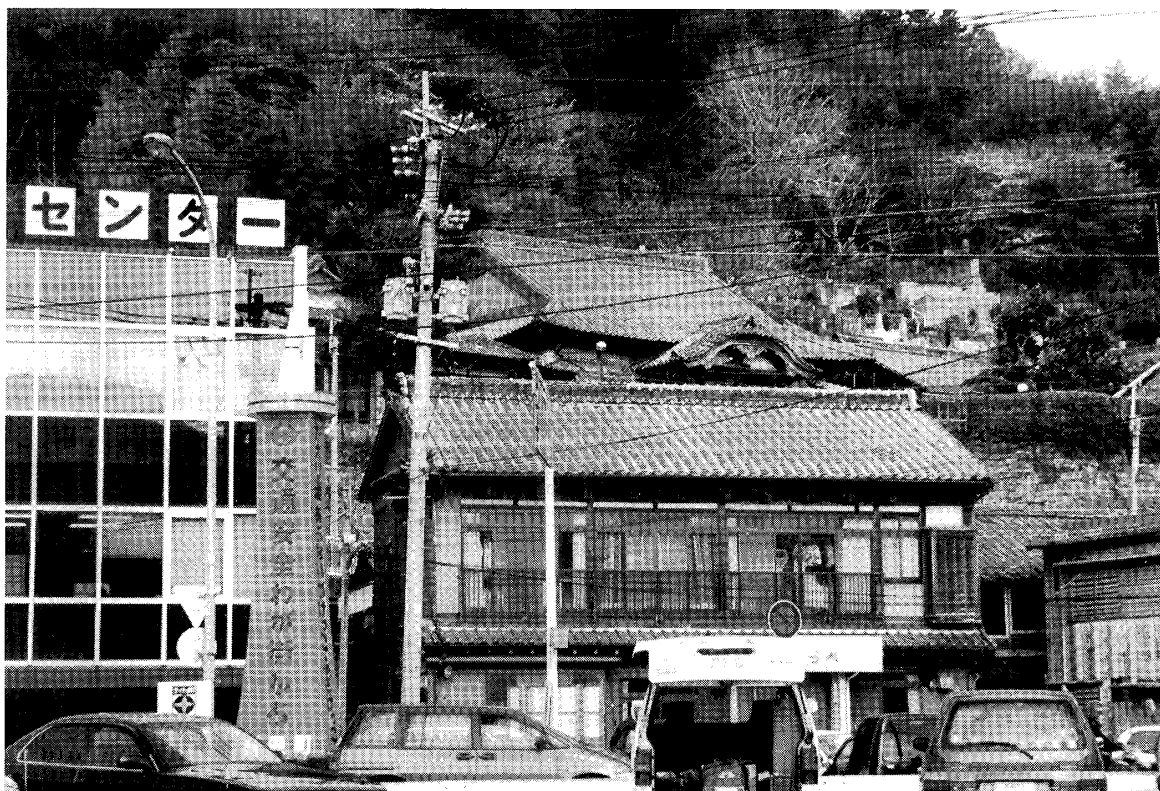


写真⑨ 厳原市街に建つ文化8年易地聘礼実施の標識（2001年3月写）

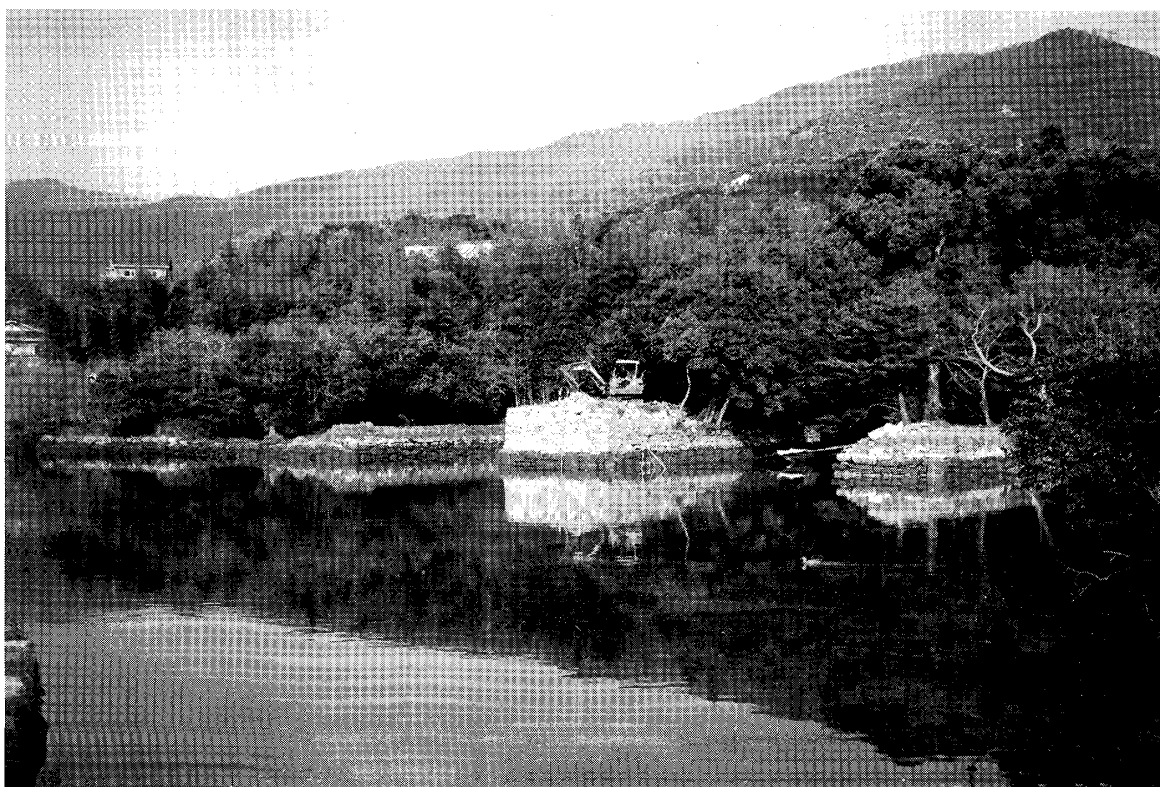


写真⑩ 最奥部からみた朝鮮通信使船団停泊水面あと（2001年3月写）  
右手前方に厳原大橋がみえる





写真⑪ 以酏庵西山寺遠望、手前の木造2階建家屋が女優津島恵子の生家（2001年3月写）



写真⑫ 対馬藩「お船江」の遺構 鋸の歯の様に船だまりが設けられている（2001年3月写）



記の標識が建てられたわけである。

対朝鮮貿易再開の早期実現に加えて、幕府と朝鮮王国の双方で相違する見解を彌縫するため、対馬藩が秘密裡に行った国書偽造事件（柳川一件）が内部告発によって発覚後、対馬藩の独断専行を断つために、京都五山僧二名が常駐し、外交文書作成の任を果たした以酊庵がおかれていた西山寺のまじかまで案内して頂けたのも収穫のひとつであった。

厳原大橋とその西詰の取付道路が通る埋立地で囲われた水面は、三隻の使臣船と三隻の卜船（貨物船）からなる朝鮮通信使の船団が停泊した水面であるという。その最奥部に面して建つ二階建の家屋は、女優津島恵子の生家で、その屋根ごしに西山寺がみえる。西山寺の寺域からは、厳原港を一望しうるのだが、団体行動のゆえに、足向けえなかった。

厳原港の南端を構成する久田浦には、対朝鮮外交をはじめ、参勤交代、さらに朝鮮通信使の船団に対する水先案内や護衛の任を果たした対馬藩船が母港とした「お船江」の遺構が保存されている。現地には、左記の表示がなされていた。

### 対馬藩お船江跡

県指定記念物・史跡 昭44・4・21指定

対馬藩の御用船をけい留した船だまりで、「お船屋」とも称する。現在の遺構は寛文三年（1663）の造成という。築堤の石積みは当時のままで、正門・倉庫・休息の建物等の遺構も残っており、往時の壮大な規模をうかがうことができる。

江戸時代、水辺の藩はいずれも藩船を格納する施設を設けていたが、遺存例の乏しい現在、日本の近世史上貴重な遺構である。江戸期鎖国下にあった時代も、日朝外交史上大きな役割を果たした対馬藩の一つの象徴ともいえよう。

朝鮮の史書「海東諸国紀」に、「仇多浦三十余戸」とあるが、その関連はよく判明しない。

厳原町教育委員会

### 注

- (1) 『朝日』一九九九年二月一六日に掲載された「白木屋で送った青春」による。昭和二十九年に入社し、大食堂でウェイトレスとして働きながら、定時制高校に通った日々の思い出が記される。
- (2) 在日韓国・朝鮮人生徒の教育を考える会―東京『東京のなかの朝鮮―歩いて知る朝鮮と日本の歴史』（一九九六年）明石書店 五二・五三ページ。
- (3) 中川浩一「朝鮮通信使史跡探索」（七）流通経済大学論集 三四の一（一九九九年）三〇・三一ページ。
- (4) 神田明神の祭礼を写した詳細な内容は、神田明神斎館資料室のビデオで視聴できる。
- (5) 注2の五一ページ。
- (6) 辛基秀・仲尾宏編『図説朝鮮通信使の旅』（二〇〇〇年）明石書店 九五ページ。
- (7) 東照宮刊行の写真の主とするガイドブック『日光東照宮』（平成十二年）は、オランダの献上品である灯籠類については、詳細な解説を行っている。
- (8) 岩波写真文庫『日光』（一九五一年）四一ページ。
- (9) 注6の九三・九五ページ。
- (10) 特別展図録には「贈答品」の部に、輪王寺所蔵の朝鮮国王孝宗親筆、祝、敵の三点がカラー図版として収められていた。
- (11) 例えば、仲尾宏『朝鮮通信使―江戸日本への善隣使節』（二〇〇一年）NHK人間講座（TV）テキスト 一〇四ページ。
- (12) 注6の一八ページ。
- (13) 下蒲刈町文化財保護委員会『御馳走一番館』収蔵品図録 No.1（平成六年）三八・三九ページ。